

ひばり

平成二十五年は、第二祖日向聖人の七百遠忌です

題字・持田日向真の筆下

第20号

発行日 平成20年12月1日

発行所 千葉県茂原市茂原1201
日蓮宗本山東身延 藤原寺
発行責任者 総務執事 増田 寶泉
TEL0475-22-3153

- 鈴木崇信上人が退職しました。(9/30)
- 新たに、神崎・真淨寺 田中妙定上人が嘱託職員となりました。(10/1)
- その、田中上人から結婚式の案内が届きました。(12/12)
- 総代さんの働きにより、事故が絶えない参道内の
十字路に信号が設置される事になりました。
- 円高が進み1ドル88円台に。(12/14)
- 貴首様・増田総務は、法務の為、22日～28日まで、
中国に出掛けます。
- 20日より、暮れのお札入れ(釜締め)のお経に
うかがいます。
- ◎ H21年のインド団参は、佛跡を全て回る予定です。



信号機設置予想図



※ 百八つの煩惱を払い
新年を迎えましょう

十二月三十一日(水)
午後二十二時より
藤原寺 山門脇にて
「お焚き上げ」
元旦 午前〇時
『新年祝祷会』

除夜の鐘

『世界の平和の確立について』

—仏教者としての提案—



持田日勇猊下

「世界平和」ということが今、世界中で呼ばれています。

二十世紀に入つて局地的な紛争が全世界の国々を巻き込むようになります。一国の安寧が世界の平和と密接不可分になつたからです。ですから「世界平和」の実現と言いますが、その願いは果てしなく壮大なものであります。

地球上のすべての人が、そして自分が、自分のための「平和」を願つています。その願いが一つにまとまることがあります。それが望ましいことです。事はそれ

ほど単純ではありません。

甲にとつて望ましいことが、乙にとつては快くない事柄であつたり、さらに丙にとつては、到底、受け入れがたいというようなことがたくさんあるからであります。お互いに譲り合つて行かなければならぬことがあります。それを、はたして譲り合つていけるかどうかが開われます。

ブッダは人生の苦しみを分析して、

「生・老・病・死」の『四苦』を説きました。さらにその苦の根源を究めて『十二因縁』を説きました。

『十二因縁』とは、「人間の過去、現在・未来の三世にわたって、生死が流転し、苦惱が展開する構造」をあきらかにしたものであります。

現在・未来の三世にわたって、生死

が苦惱に彩られている詳細を辿つていくと、①「無明」に至ると説き示されています。「無明」とは明かりのないことがあります。自然光を失うと同時に真っ暗になつてしまふ闇であります。

ブッダは、そのような心の闇が人間の根源に内在し、それが展開する途上で、さまざまな苦惱として現れてくることを教示しているのであります。

現代の先進社会では、社会的に人間が生きる」と自体においてさまざまな苦惱が存在します。そして如何に老いるのか?如何に死を迎えることが出来るのか?が、個人的課題として迫つて来ています。

便利な製品の供与のはずが、それが自体に人類崩壊の危機を内包するという矛盾の中に、われわれの生存自体が曝されているのであります。

これは思想や社会体制の枠組みを超えて、人類全体に襲いかかっている問題であります。その意味では、世界共通の苦惱の根源は、一つのものであるという論理にも繋がると言えるかも知れません。

科学文明はわれわれ人類に大きな恵みを与えてくれました。だが、その反面、自然のままに生きていた時代の人類には想像もできない困難との直面を余儀なくされていました。便利な製品、そしてそれを生み出す技術が、逆にわれわれを苦しめています。

もはや異常な発展を促進してきた人間自身に、(人類崩壊)

しめるようになつてきました。

戦争のための技術革新により、核開発が行なわれ、原子力の制御如

が死滅する危険があるほか、農業の生産性向上のための人工肥料や病害虫駆除の薬品等の発明が、生

態系そのものを破壊するという危機的現実に立たされています。(例えれば遺伝子操作による生産性の向

上についても問題があるところであります。)

便利な製品の供与のはずが、それが自体に人類崩壊の危機を内包するという矛盾の中に、われわれの生存自体が曝されているのであります。

これは思想や社会体制の枠組みを超えて、人類全体に襲いかかっている問題であります。その意味では、世界共通の苦惱の根源は、一つのものであるという論理にも繋がると言えるかも知れません。

もはや異常な発展を促進してきた人間自身に、(人類崩壊)

の根源)が内包されている」とを確認することができましょう。つまり、結論を急げば、「人類の知」によつて制御され、あるいは破壊される地球環境という現実に、われわれは改めて直面させられているのであります。

ブッダの意思を受け継ぐ佛教は、すべての社会存在(自然環境をはじめとするすべての客観的存在)は、ただ客観的に存在するものではなく、われわれ人間の認識や意思と深く関わっているという理論を深めきました。

インド佛教の『大智度論』には、「世間」という存在を「国土世間」(五蘊世間)(衆生世間)の「三世間」として意義づけています。すなわち、自然を中心とする「国土世間」と人間社会を意味する「衆生世間」とはまったく異次元の存在のように考えられがちですが、実はそうではなくて、密接不可分に関わり合っているという指摘がなされています。そうとす

るならば、(鉱物を含む)自然と人間との不可分な関係性を仲立ちするものは何であるかという問がそこに問われてきます。そしてそれは「五蘊世間」であるという答を導き出すのであります。

佛教は(五蘊)

によって、外的環境を含めて、衆生の心身を五種に分類します。①「色」(しき)物質一般と身体。物質性。②「受」(じゆ)感受作用。



わっている」との確認であります。

このようにして、「心性」と「物質」との両面が、すでにわれわれ人間に自身に内在して

いるという現実。その現実をふまえるならば、われわれを取り巻く環境と、われ自身の感性

や意思とは、一体のものであり、分離する」とのできない関係にあることを「五蘊」という受け取り方に凝縮している 것입니다。

「世界平和」とは、すべてについての平等の確立であります。

その外延としての外的 existence としての物質。そして、それに対する人間の感受性やさまざまな心作用。さらに意思。こうした「心」「身」の二面が、「心身一貫」として人間に備えています。

「平等」とは、どちらか一方が他人を律するところからは生まれません。とはいえ、一舉に「平等」の究極に達することは、あり得ない」とあります。

「真の世界平和」は、世界各国の人々一人ひとりの人間存在への深い問いかけと認識とを基本とせねばならないでしょう。そしてまた、世界各国の一人ひとりの自立は、それぞれの国家レベルでの自立として具現化していく必要があります。

私たちは、絶えず現実に即した「よりよき道」(よりよき打開策)を確認しながらも、人間存在に秘められている深遠な可能性にどこまでも忠実であらねばなりません。その深淵から、絶えず現実の動向を修正し、正しき方向を求めて行かねばならぬ



行事

ホウロク灸

(七月二十四日)

ジリジリとした夏の暑さはどこへ？ 本年は一〇八名の方々が頭痛封じのご祈祷に訪れました。



門祖講(九月三日)

日向上人を門流の祖と仰ぎ、弟子として連なる僧侶各聖が参集して、日向聖人六九五遠忌の法要を行いました。日向聖人は、日蓮大聖人、直弟子六人のお一人で、身延山第二祖・当山第二祖として、

が復活し、参加
加万灯講は、

藻原寺・東光院・実相寺・

妙弘寺・妙源寺・妙楽寺・信行寺・

正蓮寺・法蓮寺・中延結社・立正佼成会・茂原教会の全十一講が参

加し市内を練歩きました。

万灯講代表は東光院総代の伊藤隆さんでした。

子育観音大祭(十二月六日)

貴首さま導師のもと総代・世話人・各講の参集いただき、大祭が開催されました。

又、突然の発病で、入院された

いる建立主である佐藤総代の再起を願い、「ご祈願されました」。

新年祝賀会

新年祈願会

華経坊例祭

お頭講会

節分追儻式

弁天祭

稻荷大祭

観音堂春季大祭

東光院万灯講

が復活し、参

加万灯講は、

藻原寺・東光

院・実相寺・

妙弘寺・妙源寺・妙楽寺・信行寺・

正蓮寺・法蓮寺・中延結社・立正

佼成会・茂原教会の全十一講が参

加し市内を練歩きました。

万灯講代表は東光院総代の伊藤

隆さんでした。

子育観音大祭(十二月六日)

貴首さま導師のもと総代・世話

人・各講の参集いただき、大祭が

開催されました。

又、突然の発病で、入院され

た

建

立

主

の

再

起

を

願

い

ま

し

奉納

仏具奉納

寺田 憲司様

草刈機

房緑化様

石井 静榮様

丸 雅俊様

熊切 和夫様

松本 哲也様

足袋沢山

新米奉納

寺田 憲司様

お頭講会

房緑化様

新年祈願会

寺田 憲司様

華経坊例祭

房緑化様

お頭講会

房緑化様

新年祈願会

房緑化様

お頭講会

房緑化様

新年祈願会

房緑化様

お頭講会

房緑化様

新年祈願会

房緑化様

新年祈願会	一月元日(祝)0時	寺田 憲司様
華経坊例祭	一月一日十一時	房緑化様
お頭講会	一月十二日(祝)	寺田 憲司様
節分追儻式	二月 三日(火)	房緑化様
弁天祭	二月 五日(木)	寺田 憲司様
稻荷大祭	二月 六日(金)	房緑化様
観音堂春季大祭	二月十五日(日)	房緑化様